



排泄 × 4

18禁

四人の、女がいる。

— 一人は英雄王。最優と称されるサーヴァント。

— 一人は魔術師。宝石を輝きにかえる管理者の少女。

— 一人は反英雄。魔性の瞳を持つサーヴァント。

— 一人は魔術師。刻印虫を埋め込まれた薄幸の少女。

彼女たちが求めるもの。

それは聖杯？ 名誉？ 正義？

否。

彼女たちが求めるもの。

それは本当の心。キラキラとした心。

彼女たちはお互いに求め合い、慰め合い、犯し合い、

ひり出された排泄物の向こう側の

一番汚いものに包まれた一番綺麗なものを

ずっと探し続けていた。

深夜
魔女たちが集う時刻。

いくら姉さんの言葉でも
それは譲れませんっ

私とライダーの方が
絶対に変態ですっ

...

私たちが普段を
どんなにプレイを
してないから
知らないから
姉さんはそんな事
いえるんです

そうね

桜は

私の
真似をして

魔術で
おちんちんを
つけるくらし
変態なんだものね

ヌヂカッ

いいわ
こうしまじょう

お互いの
サーヴァントに
おちんちんを頼張らせて、
先にいったほうが
本当の変態だという事に



桜、この先が
気持ちいいですか？

んっ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

んっ

んっ

おちんちんの匂いで
頭がくらくら
してきそうです



はきゅ

クチャ

ザーメン、
出してくださいっ

全部
飲ませて
くださいっ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

はっ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ

クチャ
クチャ



お互い
いっぱい出したわね
ほとんど
同時かしら

どちらにせよ
姉妹そろって
変態なのだから

今日はみんな
で一番変態なプレイ

このままでは
どちらがより
変態なのか
分からないわね
でも、もういいわ
・

うんちプレイをして
楽しみましょう

「セイバー、もっとよく見せて」

私はそういうと、セイバーの柔らかな足に手をやり、ゆっくりと左右に広げてみた。ぬらりとした女性器があらわになる。

「・・・凜、これから何をされるのですか？」

心配そうに、尋ねてくるセイバー。その表情があまりにも可愛らしいものだから、ついつい意地悪を試してみたくなる。

「言われなくても、分かっているでしょう」

私はゆっくりと、指先でセイバーの一番感じる部分を撫で回した。愛液が指にまとわりつく。私が指を動かすたび、セイバーの体と反応していく。

「ああ・・・凜・・・」

「触られて、気持ちいいのかしら？」

「変です。体の奥が熱くなって・・・切なくなってくるんです」

「変態」

「もっと触ってほしいです」

「セイバーの変態」

セイバーの女性器を弄びつつ、余った親指を、いきなりセイバーの不浄の穴・・・肛門へと差し込んだ。

「ああっ。凜、そこは・・・」

「そこは？」

「違います」

「違うわ」

親指をねじり、曲げ、セイバーの直腸深くへと挿入していく。ぬらぬらとした直腸壁の感触を楽しみながら、私はいった。

「こんなにぎゅっと締め付けてきて。何が違うって言うのよ」

「嫌です・・・」

「上の口では嫌っていつてるけど、したの口はそうではないみたいね」

「そんな」

「英雄王のうんち穴」

「ここに、キスをしてあげるわ」

キス、という言葉聞いて、セイバーの体がびくっと動いた。

「あ、え、凜、それは・・・」

「何を期待しているのかしら？まさか、この私がこんな汚いうんち穴に唇を合わせるとでも思っていたの？」

私は足を広げると、セイバーの足の間に、自らの股間をすりつけた。

「上の口じゃなくて、下の口の、キス」

肛門と肛門を、びったりとくっつける。よく感触が味わえるように、指でお尻を開いて、肛門をより密着させる。

「凜の・・・お尻の穴が、私の尻の穴に触れてます・・・」

「うんち穴、って訂正しなさい」

「はい・・・うんち穴が、うんち穴が凜のうんち穴とキスしてますっ」

「ディープキスもしてあげる」

ディープキス・・・舌と舌をからませる、大人のキス。でも、下の口に舌はない。怪訝そうな顔つきのセイバーに向かって、私はいった。

「うんち穴から出てくる舌は・・・うんちに決まっているじゃない」

そして、肛門に力を入れる。私の肛門がゆっくりと開いていく。感触が肛門を合わせているセイバーにも伝わっているはずだ。それでも、セイバーは抵抗をしない。むしろ、受け入れるように、体の力を抜いていた。

「出るわっ」

ぶりゆっ　ぶりゆぶりゆぶりゆっ

私の肛門からひり出された極太うんちが、そのままセイバーの肛門を貫いて、セイバーの直腸へと入り込んでいく。

「ああっ　うんちがっ　凜のうんちが私の中に入ってきますっ」

「受け取りなさいっ　うんちで、セイバーの直腸を犯してあげるからっ」

「もっとっ　もっと犯してください、凜！私をうんちで犯してくださいっ」

ああっ
うんちがっ
凍のうんちが
私の中に
入ってきますっ



（お腹・・・ごろごろする・・・）

凜のうんちがたくさん詰まったお腹を、私はゆっくりとさすった。大量のうんち浣腸。思い出すだけでも恥ずかしい。

（少しでも動いたら、漏れてでちやいそう）

まるでお腹の中に、別の生き物が入っているかのようなだ。私はひり出さないように気をつけつつ、私を待っている人、ライダーを見た。

「お待たせしました」

「いいですよ、セイバー」

ライダーは、床に横たわっている。私は迷わず、その上に四つんばいの体勢をとった。ちょうど私のお〇んこの下に、ライダーの顔がくる。

「本当に、いいのですか？」

「もちろんです」

私の股の下で、ライダーはいった。

「このまま・・・出してください。私に、うんちをかけてください」

「でも・・・」

「それが、マスターの望みでもありませんし」

ライダーはそういうと、眼前に突き出された私のクリトリスをべろりと舐めた。愛液が糸を引き、ライダーの顔を汚す。

「私の、望みでもありません」

「うんちですよ」

「そうです。・・・私は、うんちをかけて欲しいのです」

ライダーは手を伸ばし、私の肛門に触れた。それでなくても限界だった私の肛門は、ひくつき、うごめき、そして、開いた。

「・・・うんち、出ますっ」

「出してくださいっ」

ぶりゅっ　ぶりぶりぶりっ　ぶびいっ

ものすごい音が、部屋中に鳴り響いた。私の、排泄音だ。

「ああっ、うんちがっ、うんちが止まりませんっ。ライダー！全部で受け止めてくださいっ。私のうんち、全身で感じ取ってくださいっ」

「きてっ　かけてっ　セイバーのうんちかけてくださいっ」

ぶびいっ　ぶびゅっぶびゅっぶびゅっ　びちびちびち

とめどなく、うんちが排出されていく。最初は、先ほど浣腸された凜のうんちが噴出していった。そのうんちは硬く、形を保ったまま、ライダーの体を汚していく。

「ああああ・・・まだ出ます・・・今度は柔らかいのが出ますっ」

凜のうんちをあらかじめ放出した後は、私の体の中に残っていた宿便の出番だった。ずっと体の中で熟成されていたそのうんちは、先ほどの凜のうんちとは違い、柔らかく、ぬるぬるして、そして、くさかった。

にゆるう・・・ぶびゆるる・・・ぶりゅう

「セイバーのうんち、熱くてどろりとしています・・・」

肛門から垂れ下がったうんちを手にとると、くちゆくちゅと手の平で感触を確かめながら、ライダーが感想をつぶやいた。

「くさい・・・くさいです、セイバー」

「ごめんなさい。私、たくさん食べるのに、お通じが少ないんです。だからずっと体の中に溜め込んでいたから、匂いが強烈なんです」

「これが、セイバーの体の中の匂いなんですわ」

「そうです。私、くさいんです最優のサーヴァントと称されていますが、本当の私は、ただのくさいうんちの貯蔵庫なんですっ」

私はうんちをひり出しつつ、匂いにつつまれつつ、涙を流しながら絶頂に達してしまっていた。

ぶびゅう・・・ぶび

私がいっただ後も、私の軟便はとめどなくひり出されていた。

うんちがっ
うんちが止まりませんっ
ライダー
全部で
受け止めてくださいっ



私は、マスターを愛している。サーヴァントだからというわけではなく、本当に、心の底から、マスターを敬愛し、心の底から愛している。

〈だからこそ〉

普段は言えないことを、今日は、言おうと思う。

「桜……私のうんち、食べてくれますか？」

もの凄く恥ずかしい。いつもの私なら、絶対に口に出せない言葉だ。

しかし、これが私の本心なのだ。私は、愛する人に、自らがひりだす排泄物を食べて欲しいと、昔からずっとずっと思っていたのだ。

〈でも、今の私は、うんちまみれだから〉

先ほど、セイバーのうんちを大量に体で受けて、もはやちよつとやそつと洗ったぐらいでは取れないほどのうんちの匂いに包まれているから、そのせいで、理性が効かなくなっているのかもしれない。

〈うんちの匂いで、頭の奥が痺れてるみたいです〉

だから、今は。心の奥底の言葉がイえる。

「桜、お願いします。私のうんち……桜に食べて欲しいのです」「分かったわ」

〈食べてもらえるっ。うんち、食べてもらえるっ〉

私の心が喜びに満ち溢れる。愛しい人に、一番愛しい人に、自分の一番恥ずかしい排泄物を食べてもらえる。これ以上の喜びがあるだろうか。

「どうすればいいのっ？」

桜が問いかけてくる。その顔を見るだけで、私心がときめいた。

「直接」

両手で、お尻を開き、肛門をあらわにする。桜の視線からなら、皺の一本一本までくつきりと見えるはずだ。

「直接、「こ」から、食べてください」

私はそういうと、桜の鼻先に自らの肛門をつきつけた。桜の鼻息を直接肛門で感じ取ることができる距離だ。

「ライダーの肛門、まるで生きているみたいに、ひくひくしているわ」「喜んでるんです」

私は、本心からいった。そうなのだ。私は、喜んでるのだ。

「うんち見られるの、嬉しいの？」

「はい……夢だったんです」

そういうと、私は力み始めた。桜の吐息を、肛門で感じる。私は全ての意識を、肛門へと集中させる。長い長い時間の後。

ぶすう……

うんちの塊が、肛門からひり出された。

べろり。

そのうんちを、桜が、舐めた。最初はゆっくりと、次第に、激しく。

〈うんち、舐められてるっ。桜が舐めてくれているっ〉

最愛のマスターに、自らがひりだすうんちを舐めてもらっている。あまりの嬉しさと興奮に、私は頭がおかしくなってしまうそうだった。

「出ますっ。うんちが出てきますっ。桜っ。全部食べてくださいっ」

ぶびいっ。ぶびゆるるるるっ。ぶびぶびぶびいっ。

言葉とともに、堰を切ったかのように大量のうんちがひり出されてきた。一瞬で、部屋の中が私のうんちの匂いで満たされる。卑猥な匂いだ。

くちゅ……あむ……はぐ……

むせかえるような匂いの中で、桜がうんちをほおばる音が聞こえてくる。

「……ライダーのうんち……苦いけど、美味しい……」

「桜っ。愛していますっ」

私は嬉しくて、うんちがついたままの肛門を、桜の顔へとなすりつけた。



(喉の奥に、まだライダーのうんちが残っている)

こくん。

口内に残ったうんちを全て飲み込むと、私は息を吐いた。うんちの匂い吐息に混ざっている。いや、混ざっているというより、ほとんどがうんちの匂いでしかないのだけれど。

(うんち、食べちゃった)

私は、ほおけたようなとろんとした睡で、周囲を見渡した。部屋中、いたる所に、みんながひり出した排泄物が散らかっている。

(すごい光景)

私はその場にしゃがみこみ、床に落ちていたうんちを拾い上げた。まだ暖かいそのうんちは、柔らかかった。

(このうんち、誰のうんちかしらセイバー？ライダー？それとも・・・)

「桜」

呼びかけられて、私は振り向いた。そこには、全身をうんち色で染めた姉さんが立っていた。

「何をしているの？」

「・・・うんち、拾っていたんです」

ありのままを話した。柔らかいうんちを手に取り、じっと見つめる。

「うんち、どうするの？」

姉さんが聞いてくる。私はほんやりと考え込み・・・そして、いった。

「うんち・・・姉さんに、すり込みたいです」

自分でも意外な言葉だった。私はいったい、何を考えているのだろうか？うんちを人肌にしり込みしたいなんて、なんて変態なのだろうか？

しかし、姉さんは、別に私の言葉を聞いて呆れることもなく、逆に、にっこりと笑って、いった。

「いいわよ・・・ちやうど私も、そう思っていた所なの」

姉妹は座り込み、二人の間に落ちているうんちをそっと拾っていた。

「なんか、改めて考えると、恥ずかしいわね」

「いまさら何をいっているんですか、姉さん」

「こうなると、大胆なのは私の方だった。私はうんちを手にとると、ゆっくりと、自らの胸に塗りつけた。」

「あああ・・・うんち、暖かいです」

「気持ちいい？」

「ちよっと変な感触なんですけど」

足元に落ちていたうんちを拾い、しばらくその暖かさと感触を楽しんだ後、私は姉さんの首筋に手を回した。うんちが、べったりとつく。

「どうですか？」

「暖かい」

姉さんは笑い、両手いっぱいのおうんちを、自らの胸にしり込み始めた。

くちゅ ぬちゅ ぬる

うんちを引き伸ばし、押し広げ、体中にコーティングしていく。私も姉さんと同じように、うんちを拾っては体に塗りこみ、うんちの匂いに包まれてはうっとりとしていた。

「桜」

「姉さん」

姉さんの言わんとすることを、何も聞かなくても理解できた私は、うんちまみれの体のまま、ゆっくりと姉さんと肌を合わせた。

むにゅ・・・

二人の体と体の間で、うんちがつぶされて広がる音がした。

「姉さんの体と私の体、うんちでぬるぬるになってる・・・」

「うん・・・暖かくて、そして、すごくくさい・・・」

私たちは、うんちでひとつにつながっていた。

カキム

姉さんの体と
私の体
うんちでヌルヌルに
なってる...

ヌル

うん...
暖かくて、そして
すごくくさい...

カキム

カキム

ヌル

カキム

カキム

カキム



私と、桜と
セイバーとライダーの
みんなの体の中に
詰まっていた、うんち

ぱひり出された
暖かいだから

うんちキスリレー
しましよう

...

うんち...

ムー

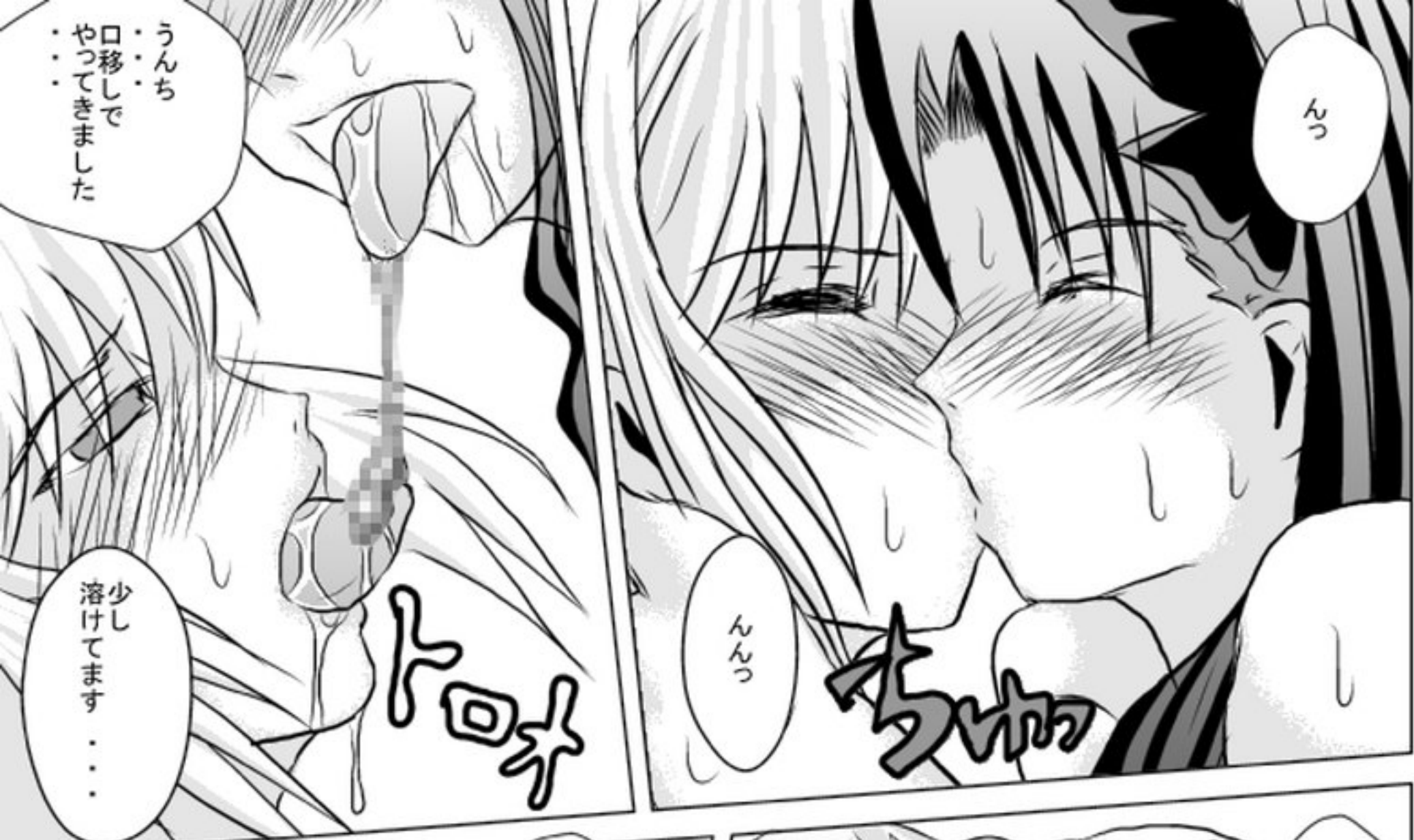
あん

おふひの中
うんちでいっぱい

美味しい

はん





うんち
口移しで
やってきました

んっ

少し
溶けてます...

トロ

んんっ

ちゅ



次には
私

ドロドロうんちの味
舌先から感じます

すごく
卑猥な味

ちゅ

あっ

ちゅ

まるで鼻先に
セイバーの肛門が
あるみたい匂いです

あ

ああっ

ちゅ

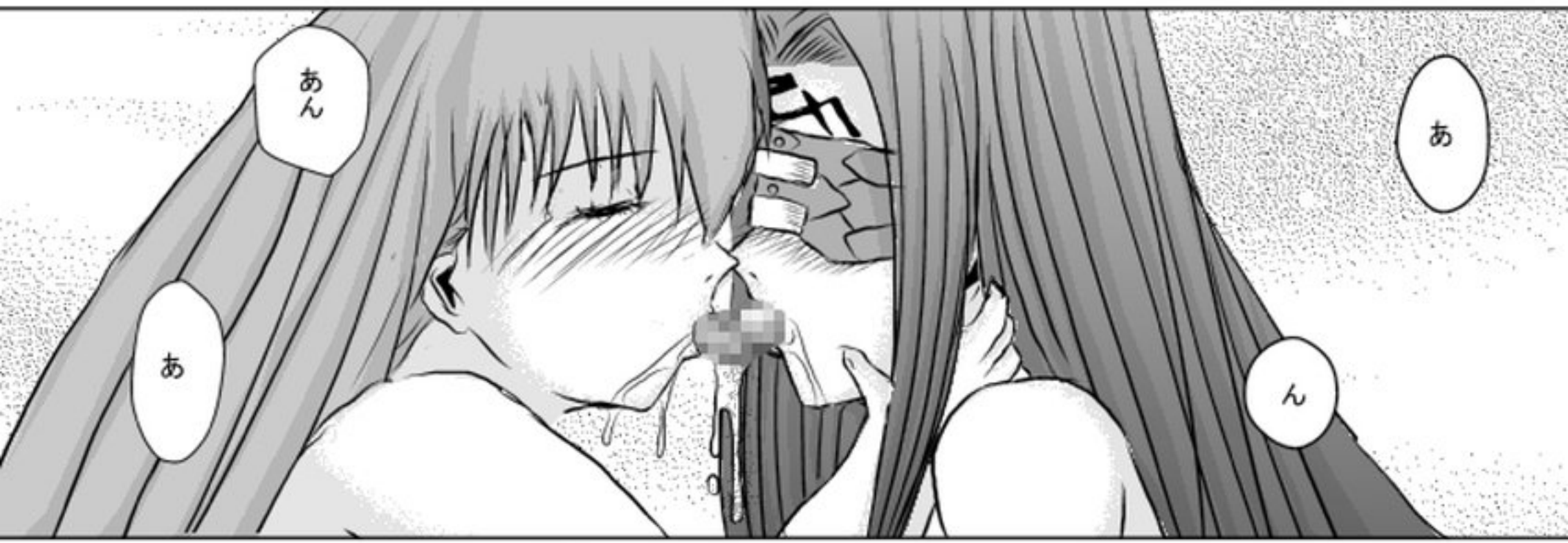
あん

ちゅ



桜...私とうんちキス
してくれませんか？

もちろんよ
ライダー
来て



あ

あん

あ

ん



うんち、
お口の中に
いっぱい...



あん

あ

あ

あん

私たちは、
一番恥ずかしい姿
・・・
排泄している姿を
お互いに見せ合い、
食し合い、
肌に塗りつけ合っている

それが
正しいことなのか
どうかは分からない

ただ・・・

だから今日も
私たちは
快楽を求め合う

言葉よりも深く
愛し合っている

うんち遊びは
気持ちいい

私たちは
・・・
幸せです



私のうんち
見えますか？

いつもたくさん
食べていますから
うんちの量も
多いんです……

うんち姿見られるの
ものすごく恥ずかしいのに
……気持ちいいんです

私はサーバントとして
どこか
おかしいのでしょうか？



なに見てるのよ
あつち向きなさいよ

そんなの
私に
見たいの？
姿

分かった
見せてあげるから

せめて
音だけは
聞かないで
……



肛門を押し開いて
中からうんちが
出てきているのが
ちゃんと見えますか？

ゴ
ゴ
ゴ

まだうんちの
頭が出てきたの
だけなのに……

ものすごい
匂いがします
……

ゴ
ゴ
ゴ

ゴ
ゴ
ゴ

ゴ
ゴ
ゴ



ごめんなさい
私ももう
我慢できません

こんな格好のまま
うんちを
ひり出したいんです

わたしが
汚れますか？



■ あとがき ■

はじめての人は、はじめまして！
お久しぶりの人は、こんにちは！

うらんふです。

うらんふ、7冊目のオフセットです。

もう7冊ですか・・・時が経つのは早いですね。
ラッキー7！ ということで、何かいい事でもあればいいのですが♪

今回の原稿は、難産でした。何が難産かといえば、「締め切りまで時間がない！」という難産でした。
1月18日の「こみっくトレジャー13」に参加した後、今回の作品を描き始めましたので
実質、製作時間が半月しかなかったのです(泣)。

でも、「自分のやりたい！」ことは全て詰め込みましたので、満足です♪

私は毎回「テーマ」を決めて同人誌を描いているのですが、
今回のテーマは「乱交」でした。
登場人物が4人なので、それぞれの組み合わせを考えてみたのです。
とはいえ、まだまだ力量不足(泣)。
「4人の乱交」というよりも「2人プレイ×2」という感じになってしまいました(泣)。

もっと精進いたします☆

あと、今回は試験的に「小説」と「一枚イラスト」を入れてみました。
私は絵を描くのも大好きなのですが、小説を書くのも大好きなのです。
小説なら、マンガではなかなかかけない心理描写まで、ねっちりみっちり描けますもんね！

今回、非常に楽しかったので、これからは「マンガ」と「小説」のスタイルをとってみようかなあ、と考えています。

あと、「一枚イラスト」
ストーリーの流れを考えると、ただ「描きたいエロ」をすぐ描く事ができるのでいいですね！
これもまた、次回からも続けてみようかと思えます。

そう考えると、今回の同人誌はなかなか思い出深いものがあります。
同じように、一緒に少しでも楽しんでいただけたのなら、嬉しいです。

だって！
私は「オナニーする」ために同人誌を描いていますから！！！！

これからも、ずっとずっと「スカトロ」だけ描いていきますので、
ふつつかもものですが、どうか宜しく願いいたします～

かしこ。

■ 奥付 ■

発行 紅い瞳と蒼い月

著者 うらんふ

2009年2月8日発行

e-mail ayanamiasuka@hotmail.co.jp

URL <http://shirayuki.saiin.net/~akaihitomi/>

印刷 ねこのしっぽ



紅い瞳と蒼い月

<http://shirayuki.sain.net/~akaihitomi/>